

『ヴェローナの二紳士』における二つの教育

団 野 恵美子

Two Types of Education in The Two Gentlemen of Verona

DANNO Emiko

大阪芸術大学大学院 藝術文化研究 第 24 号
2020 年 2 月 12 日発行

『ヴェローナの二紳士』における二つの教育

団野 恵美子

Two Types of Education in *The Two Gentlemen of Verona*

DANNO Emiko

＜序＞

シェイクスピア (William Shakespeare) の『ヴェローナの二紳士』 (*The Two Gentlemen of Verona*, 1594) は、モンテマヨール (Jorge de Montemayor) の牧歌ロマンス『ディアナ・エナモラーダ』 (*Diana Enamorada*, 1543) から題材を取った初期の喜劇である。

簡単に筋を述べると、ヴェローナの二人の紳士、ヴァレンタイン (Valentine) とプローティアス (Proteus) は幼少からの親友で、ヴァレンタインはジュリア (Julia) との恋愛に耽るプローティアスを故郷に残し、ミラノ公爵 (Duke) に仕えるために旅立つ。引き続きプローティアスも父親の勧めでミラノ公爵の下で修業することになったのだが、彼は愛の誓いと指輪を交換したジュリアへの愛情を失い、公爵の娘シルヴィア (Silvia) に一目惚れしてしまう。シルヴィアは父親が肩入れする婿候補のシューリオ (Thurio) を疎んじ、ヴァレンタインと秘密裏に婚約して駆け落ちするところであった。恋人と親友の信頼を同時に裏切って、プローティアスは自らがシルヴィアを得ようと、駆け落ち計画を大公に密告し、思惑通りヴァレンタインをミラノから追放処分にしてもらう。一方で、ジュリアは恋人を追い、道中の安全のため小姓に変装してミラノに来ていたが、プローティアスの変心を知り、そのままセバスチャン (Sebastian) と名乗ってプローティアスの小姓になります。最終幕では、ヴァレンタインを追って森に入ったシルヴィアが山賊に捕まり、後を追ってきたプローティアスに救い出され、シルヴィアに無視されたプローティアスが、激情に駆られて彼女を突如襲おうとしたところに、山賊の頭領になっていたヴァレンタインが現れる。裏切者と叱責され、恥じ入り後悔して許しを請うプローティアスに、ヴァレンタインは、寛大な友情の証として「シルヴィアに対する自分の権利を譲る」と宣言する。傍で聞いていた小姓姿のジュリアが失神して本性が明らかとなり、ジュリアとプローティアスはもう一度固く結ばれ、遅れて到着した公爵はヴァレンタインの剛毅さを認め、シルヴィアと

の結婚を祝福する。

プローティアスに急襲されたシルヴィアは、“O heaven!” (V, iv, 59)⁽¹⁾ と叫んだのを最後に沈黙を守るので、ヴァレンタインがプローティアスにシルヴィアへの権利を譲ると言ったときになぜ反論しなかったのか、ヴァレンタインは愛よりも友情を優先するのか、という疑問が生まれるのも当然である。これは中世風ロマンスの型通りの結末を踏襲したものであるから、若者二人の青春賛歌である芝居のこの箇所を真面目に問い合わせてはいけないという論が多い。⁽²⁾ たとえロマンスの定型だとしても、黙り続けるシルヴィアがいる一方で、シルヴィアを譲渡する旨を聞いたジュリアが卒倒して、注目を浴びながら最初に言う台詞が “O good sir, my master charged me to deliver a ring to Madam Silvia; which (out of my neglect) was never done.” (V, iv, 86-8) である。自分がプローティアスに渡した誓いの指輪を、プローティアスに命じられたもののシルヴィアに渡せず、まだ持っていることを言う。自らの素性を明かす証拠となる指輪を、取り違えた風に “Here 'tis: this is it.” (V, iv, 90) と見せることで、ジュリアはプローティアスに対して積極的な行動に出ている。第一幕では、プローティアスからの手紙を侍女から受け取ることすら躊躇って、“Since maids, in modesty, say 'no' to that / Which they would have the profferer construe 'ay.'” (I, ii, 55-6) と乙女心をのぞかせていたのとは大違いである。ヴァレンタインも、シルヴィアを譲ると言った舌の根も乾かぬうちに、30行あとの台詞では、“Come, come; a hand from either; / Let me be blest to make this happy close:” (V, iv, 115-6) と、プローティアスとジュリアの手を取り、愛を誓わせて結婚の神ハイメンのように振舞っている。

このように冒頭から最終幕までの間に、登場人物の言動が変化していく理由をどう説明できるだろうか。まず、若者二人が故郷を出てミラノに行くことになった訳が、様々な人の台詞で繰り返され強調されていた。ヴァレンタインは、“Home keeping youth have ever homely wits.” (I, i, 2) と、家に籠っていては知恵がつかないことを言い、プローティアスの屋敷の執事パンシーノ (Panthino) は、プローティアスを宮廷に送り世間を学ばせるようにと父親アントニオ (Antonio) に進言する。

[Pan.] Some to the wars, to try their fortune there; ある者は運試しに戦争へ行き、
Some, to discover islands far away; ある者は遙か遠くの未知の島を見つけに行く、
Some, to the studious universities. ある者は勉強するために大学へ。
For any, or for all these exercises, どれにても、いやこれら全てを取り上げても
He said that Proteus, your son, was meet, 息子プローティアスはそれに見合った人物だから
And did request me to importune you 彼をこれ以上故郷で時を過ごさせないように
To let him spend his time no more at home; 私から旦那様にお願いするようと言われまして。

(I, iii, 8-14, Italics mine)

戦争で手柄をたてるか、大海に乗り出して未知の島を発見するか、大学で勉強するか、と若さを無駄遣いせず家から出ることを勧めている。実はアントニオも息子の教育をしつかりと考えており、次のように言う。

[Ant.] I have consider'd well his loss of time, 私も、世間で揉まれ試練を受けなければ

And how he cannot be *a perfect man*, 時間を浪費するばかりで

Not being tried and tutor'd in the world: 彼は完璧な男になれないと考えていた。

Experience is by industry achiev'd 経験は研鑽を積んでこそ得られるものだ

And *perfected* by the swift course of time. それに素早い時の流れによって完成する。

(I, iii, 19-23, Italics mine)

アントニオは、若者を“perfect”な紳士に仕立てることが重要だと考えている。エリザベス朝における完璧な紳士とは、社交術にたけた宮廷人で、政治的にも道徳的にも優れた振る舞いが求められた。パンシーノは、ミラノ公爵のところへ行けば、“There shall he practice tilts and tournaments, / Hear sweet discourse, converse with noblemen, / And be in eye of every exercise / Worthy his youth and nobleness of birth.” (I, iii, 30-3) と、宮廷で催される馬上槍試合や武芸訓練、貴族同士の洗練された会話を学べると言う。

しかし教育の場は宮廷だけにとどまらない。ヴァレンタインの召使いスピード (Speed) は、シルヴィアに手紙を代筆させられた上でその手紙を突き返され悩むご主人様を見て、“Why, she woos you by a figure.” (II, i, 140) と、それはシルヴィアが凝ったやり方でご主人様を口説いているだけだと教えている。プローティアスの召使いラーンス (Launce) は、“I am but *a fool*, look you, and yet I have the wit to think my master is a kind of a knave;” (III, i, 261-2, Italics mine) と、ミラノ公爵もヴァレンタインも見過ごしていたプローティアスの悪事を見抜く知恵を持っている。ただしご主人様に寄り添うスピードと違い、このラーンスは、ご主人様に常に同行するよりも勝手な行動をしていることが多く、そのためプローティアスからジュリアへの恋文を届けたのもヴァレンタインの召使いであるスピードであった。

こういったことから、本論では、『ヴェローナの二紳士』における宮廷での伝統的な紳士教育と、日常生活を共に過ごす召使いからの助言という二つの教育方法を中心に、ヴァレンタインとプローティアスの教育到達度の違いや、ジュリアとシルヴィアの役割や立場を探っていきたい。特に、唐突とも思える最終幕のヴァレンタインの台詞の意味を、教育の成果として現れたものとして考察したい。

< 1 > ヴァレンタインの場合

名声に憧れ、海外の珍しいものを見るためにミラノの宮廷に出るヴァレンタインは、恋に溺れ故郷から離れられないプローティアスを冷笑して、恋なんて “How ever, but a folly bought with wit, / Or else a wit by folly vanquished.” (I, i, 34-5) だと、恋による愚行は知恵のない奴がするものと考えていたが、ミラノに着いた途端にシルヴィアに一目惚れしてしまう。その恋の熱量は、それまで揶揄していたプローティアスに劣らぬほどで、シルヴィアの手袋が道に落ちていると、“Let me see; ay, give it me, it's mine. / Sweet ornament, that decks a thing divine! / Ah, Silvia, Silvia!” (II, i, 4-6) と、シルヴィアを女神扱いし、その美しい手を包む手袋を頬ずりせんばかりに崇めている。シルヴィアに恋煩いしている状態が、プローティアスと同じくらい馬鹿げていることを教えるのは、召使いのスピードである。

[Spe.] Marry, by these special marks: first, you have 独特の徵候で分かります。まずプローティアス learned (like sir Proteus) to wreath your arms like a 様みたいに憂鬱病者の様に腕を組んで malcontent; to relish a love-song, like a robin-redbreast; コマドリのように恋の歌を歌って、 to walk alone, like one that had the pestilence; 疫病患者のように一人で歩き回り、 to sigh, like a schoolboy that had lost his ABC; ABC の本を失くした小学生のように溜息をつき、 to weep, like a young wench that had buried her grandam; 祖母を埋葬した小娘みたいに泣き、 to fast, like one that takes diet; 食餌療法をする者みたいに食べず、 to watch, like one that fears robbing; 泥棒を恐れる人みたいに夜は眠らず、 to speak puling, like a beggar at Hallowmas. 万聖節の物乞いみたいに哀れっぽい声を出すんです。

(II, i, 17-25)

憂鬱症のように腕を組んだり、疫病患者のように一人で歩き回ったり、教科書を失くした小学生のように溜息をつくなど、恋煩いする若者が見せる兆候を一つ一つ順番に挙げながら、『空騒ぎ』 (*Much Ado About Nothing*) のベネディック (Benedick) がクローディオ (Claudio) に対して、『お気に召すまま』 (*As You Like It*) のロザリンド (Rosalind) がオーランド (Orlando) に対して解説するように、幾分楽し気にヴァレンタインをからかっている。ヴァレンタインの馬鹿さ加減は、“shine through you like the water in an urinal” (II, i, 38) だと、尿から診断しても煌めいていて、素人目にも恋愛病は明確だと言う。

ヴァレンタインがシルヴィアに恋をして、冷静な判断を失いつつあることを、スピードは禅問答のようなやり取りを通じて、ご主人様の目を覚ませようとしている。

[Val.] I have loved her ever since I saw her, and still I see 彼女を見てからずっと恋している

『ヴェローナの二紳士』における二つの教育

Her beautiful. それに俺は彼女がずっと美しい人に見える。

[Spe.] If you love her, you cannot see her. 彼女を愛しているなら、見えていませんね。

[Val.] Why? どうしてだ。

[Spe.] Because Love is blind. 恋は盲目ですから。

(II, i, 63-7)

恋は盲目だから、恋をすればその人が見えなくなるはず、という論法で、シルヴィアを美しいと褒めたたえるヴァレンタインを、本当は彼女のことが見えていないだと諫めている。そして、ヴァレンタインの現在の愚行は、“being in love, could not see to garter his hose; and you, being in love, cannot see to put on your hose.” (II, i, 72-4, Italics mine) であると、靴下留めを忘れてタイツをだらしなく垂らすプローティアスよりも、タイツを履き忘れているヴァレンタインの方が重症であると、日用品である衣服を例に挙げて説明する。この効果はすぐに表れ、ヴァレンタインは同じレトリックを逆手にとって、召使いの務めを怠ったスピードをやりこめるほどその教えを習得している。

[Val.] Belike, boy, then *you are in love*, for last morning お前もどうやら恋をしているな、昨日の朝

You could not see to wipe my shoes. 見えなくなつて俺の靴を磨き忘れただろう。

[Spe.] True, sir: *I was in love with my bed.* I thank you, you はい、ベッドに恋をしました、旦那
swinged me for my love, which makes me the bolder 様が叩いて恋から目覚めさせてくれたので、
to chide you for yours. 私も堂々と旦那を叱れるのですよ。

(II, i, 75-9, Italics mine)

スピードもヴァレンタインの謎かけに対して、「正解」と教え子の上達ぶりを喜びながら、ベッドに恋して寝坊して引っ叩かれた身として、召使いであっても同様に主人が恋をして愚行に走れば叱る権利があるのだと主張している。

ミラノ公爵の娘シルヴィアは、ヴァレンタインに宮廷恋愛風の教育を施している。ヴァレンタインはシルヴィアから恋人に贈る詩を書くように頼まれて、手紙を書いてシルヴィアに渡すと、このような骨折りはもうたくさんだと思ったに違いないと言われ、“No, madam; so it stead you, I will write / (Please you command) a thousand times as much. / And yet—” (II, i, 106-7) と、お役に立てるならいくらでも書くけれども、と言いよどんだところで、シルヴィアから謎かけのような言葉を返される。

[Sil.] A pretty period. Well, I guess the sequel; 素敵な止め方。その続きを当ててみましょう、

And yet I will not name it: and yet I care not. しかし、続きを言わないし、しかし、どうでも構わない

And yet take this again; and yet I thank you, しかし、これは返します、しかし、お礼を言いますね
Meaning henceforth to trouble you no more. つまり二度とあなたにご面倒はかけません。

(II, i, 109-13, Italics mine)

シルヴィアの台詞の2行の中に、わざと4回も“and yet”を組込み、ヴァレンタインに自分の意図を探らせようとしている。しかし、シルヴィアが手紙の文面を気に入らず戻したのだとしか考えられないヴァレンタインに、シルヴィアは次々とヒントを出していく。

[Sil.] … they are for you. それはあなたのものです。

I would have had them writ more movingly. もっと感動的に書いてほしかったのですが。

[Sil.] And when it's writ, for my sake read it over. 書いたら、私のために読み返して下さい

And if it please you, so; if not, why, so. お気に召したらそれでいい、そうでなければそれでもいい

[Sil.] Why, if it please you, take it for your labour; お気に召したら、それを労働のお礼に受け取って。

(II, i, 120-6)

シルヴィアは、「あなたのものです」、「読み返してください、お気に召すならそれでいい」、「お気に召したら、お骨折りのお礼に差し上げる」と、ヴァレンタインが代筆した手紙はヴァレンタインに渡す目的のものだと暗に示すが、彼には暗示を込めた言葉遊びが理解できない。しかし、スピードは主人よりも的確にシルヴィアの意図を理解している。

[Spe.] O jest unseen, inscrutable, invisible, ああ洒落が眼に入らず謎めいていて見えない、

As a nose on a man's face, or a weathercock on a steeple! 自分の鼻、塔の上の風見鶏のようだ

My master sues to her; and *she hath taught her suitor*, 旦那様は彼女に求愛し、彼女は生徒である

He being *her pupil*, to become her tutor. 旦那様を教育して、自分の教師にしようとしている。

(II, i, 128-31, Italics mine)

当事者には見えない、自分の鼻や塔の上の風見鶏のような洒落だと察して、シルヴィアが求愛してきたヴァレンタインを生徒として (*her pupil*) 教育する (*taught*) つもりであることを、ヴァレンタインに教えている。

スピードと「恋は盲目」である洒落を練習した成果は、シルヴィアとシューリオとの会話に見られる。プローティアスが恋人の水晶のようなまなざしに閉じ込められていなければ、自分と一緒にミラノに来られたことをヴァレンタインが話している。

[Sil.] Belike that now she hath enfranchis'd them もう今は彼女はその方の目を解放したのですね

Upon some other pawn for felty. 他の誰かの忠誠と引き換えにして。

[Val.] Nay, sure, I think she holds them prisoners still. いいえ、まだ彼の目を虜にしていますよ

[Sil.] Nay, then he should be *blind*, and *being blind* それなら彼は盲目ね、目が見えないなら

How could he see his way to seek out you? どうやってあなたを探す道が見えたのかしら。

[Val.] Why, lady, *Love hath twenty pair of eyes.* いや恋には 20 対もの目があるといいます。

[Thu.] They say that *Love hath not an eye at all.* 恋には一つも目がないと言われています。

[Val.] To see such lovers, Thurio, as yourself: シューリオ、あなたののような恋人を見る目はない

Upon a homely object, *Love can wink.* つまらぬものに対しては、恋は目をつぶるのだ。

(II, iv, 85-93, Italics mine)

シルヴィアが恋する人は盲目なのに、なぜヴァレンタインに会いに来られたのかと謎をかけるが、ヴァレンタインは当意即妙に「恋には 20 対の目がある」と答えることができ、おまけに「恋は盲目」だと言い張るシューリオに対しては、つまらない者には恋は目を閉じると言い負かすことができた。

しかしながら、ミラノ公爵にアントーニオの息子プローティアスを知っているかと聞かれると、“And though myself have been an idle truant, / Omitting the sweet benefit of time / To clothe mine age with *angel-like perfection*, / Yet hath Sir Proteus (for that's his name) / Made use and fair advantage of his days: / His years but young, but *his experience old*; / His head unmellow'd but *his judgment ripe*” (II, iv, 59-65, Italics mine) 時は天使のような完璧さを授けてくれるのに、自分は怠け放題で、プローティアスは時を無駄にせずに、経験においては老成して判断力も成熟していると、劇の冒頭でプローティアスを揶揄していたことと全く正反対の言葉を繰り出している。プローティアスを未熟な若者であるが完璧な紳士であると称賛するのは、修辞法を駆使した宫廷風の誉め言葉にしても誇張が過ぎ、真実味が薄い。また、シルヴィアのことを “heavenly saint” (II, iv, 140), “divine” (II, iv, 142), “if not divine, / Yet let her be a principality” (II, iv, 146-7) と、天上の女神扱いをするほど冷静な判断を失っており、プローティアスの恋人ジュリアをも、“She shall be dignified with this high honour, / To bear my lady's train” (II, iv, 153-4) と表現して、シルヴィアのドレスの裾を持つ侍女になれば、それがジュリアの格上げになると言つてプローティアスの機嫌を損ねている。

このように宫廷での紳士教育は、ヴァレンタインにとって言葉を操る能力は優れたものの、厳しい現実の社会を知る知恵は身についていなかった。公爵に女性の口説き方を教えてほしいと頼まれたとき、“Flatter, and praise, commend, extol their graces; / Though never so black, say they have angels' faces; / That man that hath a tongue, I say is no man, / If with his tongue he cannot win a woman.” (III, i, 102-5) と、醜い女性にも天使のように

美しいと平気で嘘をつくことを勧め、女性を口説けない男は男ではないと大見得を切っている。宮廷人を気取って、公爵に問われるがままに、女性に近づくのは「夜」で「窓から」、「縄梯子」を「長いコートの下に隠して」と自らの駆け落ちの手段をそのまま暴露することになる。この時点でのヴァレンタインの態度は、激怒した公爵の台詞に見てとれる。

[Duke] Why, *Phaëton*, for thou art Merops' son やいパエトン、メロップスの息子だからと
Wilt thou aspire to guide the heavenly car? おまえは天の戦車を御して
And with *thy daring folly* burn the world? その無謀な愚行で世界を炎上させるつもりか。
Wilt thou reach stars, because they shine on thee? 頭上に星々が輝いているからと、そこまで
(III, i, 153-6, Italics mine) 昇っていくつもりなのか。

太陽神の子パエトンが思い上がって、太陽の二輪戦車を御して世界を炎上させようとした愚行を、シルヴィアという星を手に入れようとしたヴァレンタインの愚行にかけて叱責している。未熟で力不足な若者の例としてパエトンが使われており、ゼウスに雷電を投げつけられてパエトンが戦車から放りだされたように、ヴァレンタインは公爵に追放命令を突き付けられて、シルヴィアのいる宮廷から去ることになる。

< 2 > プローティアスの場合

ヴェローナでのプローティアスは、ヴァレンタインに “Love is your master, for he masters you; / And he that is so yoked by a fool / Methinks should not be chronicled for wise.” (I, i, 39-41) と、恋に囚われ恋の愚行に引き回されるのは賢明なことではないと説教されていた。他にも、“Even so by Love the young and tender wit / Is turn'd to folly, blasting in the bud, / Losing his verdure, even in the prime, / And all the fair effects of future hopes.” (I, i, 47-50, Italics mine) と、恋をすると若く柔らかな頭脳が蝕まれて馬鹿になり、人生の春の季節に、花では色艶、人間では勉学の機会を失って、男として将来の幸せが花咲かせることができなくなるぞ、と脅されている。

この勉学に励む機会については、ピーチャム (Henry Peacham) の『完璧なる紳士』 (*Compleat Gentleman*, 1634) にも勉学に適した時という章において、“As the spring is the only fitting seede time for graine, setting and planting in Garden and Orchard: so youth, the *Aprill* of mans life is the most natural and convenient season to scatter the Seeds of knowledge upon the ground of the mind”⁽³⁾ と書かれている。学問を深めることは、最適な時を選んで花壇に種を蒔くことが大切であるように、人生の若い頃に、心に知識の種を蒔くことが大事であることがわかる。プローティアスも一族の名声を求めるなら、ミラノに行って勉強するべきだということは重々承知している。

『ヴェローナの二紳士』における二つの教育

[Pro.] He after honour hunts, I after love; 彼は名声を求める、俺は恋を求める
He leaves his friends, to dignify them more; 彼は自分の一族の名を高めるため、一族と別れ
I leave myself, my friends, and all, for love; 俺は恋のため、俺も一族も全てを捨てる
Thou, Julia, thou hast metamorphos'd me; ジュリア、君は俺を変えてしまったのだ
Made me neglect my studies, lose my time, 俺は勉学を怠り、時を浪費し
War with good counsel, set the world at nought; 良き助言を聞き入れず、世間を無視し
Made wit with musing weak, heart sick with thought. 物思いで知恵を鈍らせ、心を病み衰えさせる
(I, i, 63-9, Italics mine)

プローティアスは恋のために一族の名誉や勉学も捨てると表明し、自分をこのように自堕落にしたのはジュリアのせいだとする。勉強をやめて、ただ時間を浪費して物思いに耽るという、完璧な紳士からは遠い状態にある。

父親アントニオは、息子がヴェローナに留まっていることを心配し、“I have consider'd well his loss of time, / And how he cannot be a perfect man,” (I, iii, 19-20, Italics mine) と完全無欠の男になってくれることを願っているため、プローティアスは、ジュリアからの手紙を読んでいるところを見つかると、ヴァレンタインからのミラノ便りだと嘘をつくことになる。プローティアスは、その直前に自分たちの父親が二人の愛に拍手をして、結婚の同意をして幸せを固めてくれたらと願ったばかりなので、咄嗟に嘘が口に出たにせよ、本心と行動が伴っていないことが明らかである。プローティアスは、自分の支離滅裂な行動を悔いて、このように嘆く。

[Pro.] I fear'd to show my father Julia's letter, 俺はジュリアからの手紙を父親に見せるのが怖かった
Lest he should take exceptions to my love, 父親が俺の恋路を邪魔すると思ったからだ
And with the vantage of mine own excuse すると俺の言い訳を逆手にとって
Hath he excepted most against my love, 父親は俺の恋路に強烈な横やりを入れてきた。
O, how this spring of love resembleth ああ、この恋は季節でいうなら春
The uncertain glory of an April day, 変わりやすい4月の空に似ているのだ
Which now shows all the beauty of the sun, 今太陽の美しさを見せていたかと思うと
And by and by a cloud takes all away. たちまち一片の雲が全てを奪い去ってしまう。
(I, iii, 80-7, Italics mine)

ジュリアとの恋を天候が変わりやすい4月の空に譬えることで、プローティアスは恋の成就の困難さを訴えているが、それと同時にジュリアからシルヴィアへ心を移すことになるブ

ローティアス自身の移り気も予測させる言葉になっている。

紳士の修行をするためにミラノへ行くと、プローティアスはそれまでの恋煩いの男から、策略をめぐらす悪党に変身してしまう。ヴァレンタインへの友情が冷め、シルヴィアを熱烈に愛し始めたことを悟ったとき、“How shall I dote on her with more advice, / That thus without advice begin to love her? / 'Tis but *her picture* I have yet beheld, / And that hath dazzled my reason's light; / But when I look on *her perfections*, / There is no reason but I shall be blind.” (II, iv, 203-8, Italics mine) とシルヴィアの一瞬の姿 (picture) しか目にしていないのに理性を失うほど惚れたのに、それが完全な本体 (perfections) を目の当たりにしたら、目が眩むだろうと宣言する。そして、友情を取るか恋愛を優先させるかを自問自答するとき、ヴェローナでは喪失していた利己心がミラノにきてむくむくと現れてくる。

[Pro.] To leave my Julia, *shall I be forsown*; ジュリアを捨てれば、誓いを破ることになる

To love fair Silvia, *shall I be forsown*; 美しいシルヴィアを愛せば、誓いを破ることになる

To wrong my friend, *I shall be much forsown*. 友を裏切れば、もっと大きな誓いを破ることになる

And ev'n that power which gave me first my oath それに最初の誓いを立てさせた力が

Provokes me to this threefold perjury. 俺をこの3重の誓いやぶりに駆り立てている

…

Julia I lose, and Valentine I lose; 俺はジュリアを失い、ヴァレンタインを失うことになる

If I keep them, I needs must *lose myself*; 二人を持てば、自分自身を失わなければならない

If I lose them, thus *find I by their loss*; 二人を失うと、その代わりにヴァレンタインの代わりに

For Valentine, myself; for Julia, Silvia. 俺自身を、ジュリアの代わりにシルヴィアを見出せる

I to myself am dearer than a friend, 俺は一人の友より自分自身の方が大切だ

(II, vi, 1-5, 19-23, Italics mine)

プローティアスは、ジュリアを捨て、シルヴィアを愛し、ヴァレンタインを裏切ると誓い破りになると言うが、これは全て同じ出来事を異なる視点からとらえただけなので、それを“shall I be forsown”と3回繰り返すことで、彼の本心からの決意が固まったことがわかる。ここでは愛を取るか、友情を取るかではなく、自分本位の態度を言い訳しているに過ぎない。シルヴィアにヴァレンタインやシューリオのように正々堂々と求愛するのではなく、プローティアスは、“I cannot now prove constant to myself, / Without some treachery us'd to Valentine.” (II, vi, 31-2, Italics mine), “But Valentine being gone, I'll quickly cross, / By some sly trick, blunt Thurio's dull proceeding.” (II, vi, 40-1, Italics mine) と漏らすように、裏切りやずるい手を使って二人のライバルを蹴落としてからシルヴィアを獲得しようと目論む。ヴェローナでは恋煩いをして日々を無為に過ごしていただ

けだが、ミラノでは、ヴァレンタインだけではなく、シューリオも公爵も騙して自分の計画通りに進める知恵と行動力がついている。公爵から、娘がヴァレンタインを忘れシューリオを愛するように仕向ける方法を聞かれると、会話の主導権を握って、自分がシルヴィアに近づけるよう誘導していく。

[Duke] Ay, but she'll think that it is spoke in hate. だが、娘は憎しみが言わせた中傷だと思うだろう
[Pro.] Ay, if his enemy deliver it. はい、彼の敵が伝えればそうなりましょう。

Therefore it must with circumstance be spoken ですから彼女が彼の友人だと思う人物から
By one whom she esteemeth as his friend. それとなく伝えてもらわねばなりません。

[Duke] Then you must undertake to slander him. それなら君に彼をけなしてもらうことにしよう。
[Pro.] And that, my lord, I shall be loath to do: 閣下、そんなことはしたくありません。

'Tis an ill office for a gentleman, 紳士にとって、中傷するなどもってのほか、
Especially against his very friend. 親友に対してならなおさらいけません。

(III, ii, 34-41, Italics mine)

[Pro.] You have prevail'd, my lord: if I can do it 仰せの通りにいたします、閣下、私が彼を中傷
By aught that I can speak in his dispraise, して、それが功を奏するならば、
She shall not long continue love to him. 彼女は彼をそう長く愛することはないでしょう。

(III, ii, 46-8, Italics mine)

プローティアスは、人を中傷することは紳士の仁義に劣るので、特に親友が相手ならば絶対にできないという舌の根も乾かぬ間に、公爵の仰せに従いますと、ヴァレンタインの悪い噂を吹き込む役目を引き受ける。

ヴァレンタインが召使いから日常生活における教育を受けていたのと違い、プローティアスはラーンスと接点を持つことが少ない。ラーンスはスピードと会話する場面が多く、プローティアスが、“How now, you whoreson peasant, / Where have you been these two days loitering?” (IV, iv, 43-4) , “Go, get thee hence, and find my dog again, / Or ne'er return again into my sight.” (IV, iv, 58-9) とラーンスの不在をなじり、役目を果たさない限りは帰ってくるなと言うほど、主人と召使いの会話がほとんどないのである。

召使いがプローティアスの悪行を正さない代わりに、唯一シルヴィアが “Thou subtle, perjur'd, false, disloyal man” (IV, ii, 92) と、彼の数々の汚いやり口を非難する。プローティアスが罪深い求愛をしてくることを軽蔑し、“by and by intend to chide myself, / Even for this time I spend in talking to thee.” (IV, ii, 100-1) と、彼と会う時間さえ嫌惡する。少しも彼になびかないシルヴィアに対して、プローティアスがせめて彼女の肖像画が欲しいとね

だと、シルヴィアの返答は痛烈な皮肉が込められており、かつプローティアスの本性を的確に言い当てている。

[Sil.] I am very loath to be *your idol*, sir; おまえの偶像になるのはゾッとするけれど

But, since your falsehood shall become you well 影を崇拝し、偽者を憧憬するのは

To worship shadows, and adore *false shapes*, 偽りそのもののお前によく似合う

Send to me in the morning, and I'll send it. 朝に使いをよこしなさい、絵姿を差し上げます。

(IV, ii, 125-8, Italics mine)

プローティアスは、人の表面的な部分しか理解できない浅薄な人間であるので、絵姿という本物ではないものを崇めるのが似合うと、彼の行為にも批判を込めている。またシルヴィアはヴァレンタインを追って、マンチュアの森へ入ったときにもプローティアスに教育的指導を行っている。

[Sil.] Read over Julia's heart, thy first best love, おまえの初恋相手、ジュリアの心を読み取りなさい

For whose dear sake thou didst then read thy faith その大事な人のために真心を裂いて千もの

Into a thousand oaths; and all those oaths 誓いを立てておきながら、私を愛してそれらの誓いを

Descended into perjury to love me. 偽りに引き下げるのだ。

….

Thou counterfeit to thy true friend! おまえは眞の友を騙したのです。

(V, iv, 45-53)

シルヴィアは裏切者のプローティアスを蔑み、ヴァレンタインの恋人であった自分に愛を求めるのをあきらめて、初恋の恋人であったジュリアの心を読み取るように促す。しかし、反省するどころかプローティアスは “I'll woo you like a soldier, at arm's end, / And love you 'gainst the nature of love: force yo.” (V, iv, 57-8) と、紳士の仮面を脱ぎ捨てて、剣で脅すような愛し方をするといい、腕力でシルヴィアをものにしようとする。プローティアスは利己心が強く、ミラノの宮廷に移ってからよりそれが明確となり、町を離れた森の中でも、その本性は全く変わることがなかった。

<3> ジュリアの場合

ヴェローナでプローティアスに愛されたジュリアは、プローティアスを追ってミラノへ赴く。彼女が教育を受けるのは、自分の手帳と言えるくらい内面を知っているルーセッタ (Lucetta) からである。ジュリアにとって愛しいプローティアスに会うまでの道のりは、

信心深い巡礼が辿る道と同じで、長くても辛くはないと浮かれていると、ルーセッタは、“Better forbear, till Proteus make return.” (II, vii, 14) ときっぱり相手の帰国を待つように諭す。ジュリアはプローティアスのことを “divine perfection as sir Proteus” (II, vii, 13), “my soul's food” (II, vii, 15) と理想化して心に思い描いているが、ルーセッタはジュリアの恋の火が理性を失うほど燃え上がらないように、火の勢いを抑えようとする。

[Jul.] And there I'll rest, as after much turmoil そこで私は安らぐの、数多くの苦難を経た後

A blessed soul doth in Elysium. 祝福された魂が天の楽園で安らぐように。

[Luc.] But in what habit will you go along? でもどういう服装で旅をされるのですか。

[Jul.] Gentle Lucetta, fit me with such weeds 優しいルーセッタ、評判のいい小姓に似合うような服を
As many beseem some well-reputed page. 私に見つけてちょうだい。

[Luc.] Why, then your ladyship must cut your hair. それなら髪の毛も切らなければなりませんね

[Luc.] You must needs have them with a cod-piece, madam. 股袋をつける必要がありますよお嬢様

[Jul.] Out, out, Lucetta, that will be ill-favour'd. 嫌よ、嫌よ、ルーセッタ、そんなみっともないもの

[Luc.] I fear me he will scarce be pleas'd withal. 彼が喜んで迎えて下さるのか心配です。

[Luc.] All these are servants to deceitful men. それらは全部男が女性を騙すときの道具ですよ。

(II, vii, 37-8, 42-4, 53-4, 67, 72)

ルーセッタは、ジュリアが自分を恋の巡礼者に譬えて浮足立っていると、旅の道中に必要な現実的な考えを持たせるように、服装や髪形、ズボンの形を確認していく。股袋を付ける度胸がジュリアにあるかを確かめ、プローティアスに再会したときに想像と違って意気消沈しないように、男性が久しぶりに故郷の女性に会って喜ぶのかどうか懸念も示している。ルーセッタの実際的な助言のおかげで、ジュリアはプローティアスにシルヴィアへのお使いを頼まれると、こんな空しい使いをする女がこの世に何人いるかと嘆きながらも、“Alas, poor Proteus, thou hast entertain'd / A fox, to be the shepherd of thy lambs. … I am my master's true confirmed love, / But cannot be true servant to my master, / Unless I prove false traitor to myself.” (IV, iv, 90-105, Italics mine) と、羊の番に雇われた狐のように、プローティアスの命令に従順なだけの召使いにはならないことを明言し、ご主人様の裏をかき、自分の利益になるように行動する場合もあることを示唆している。

ジュリアがシルヴィアと対面して、プローティアスの言いつけで指輪を渡し、シルヴィアの絵姿を受け取るときの会話も、ジュリアは意図的にプローティアスが女性の敵であるという意識をシルヴィアに与えるように誘導しているようだ。ジュリアは美しい人だったかと聞かれると、“She hath been fairer, madam, than she is: / When she did think my master lov'd her well, / She, in my judgment, was as fair as you.” (IV, iv, 147-9) と、愛が

女性の美しさに影響を与えるというルネサンスの概念⁽⁴⁾を利用して、美しさが劣化した原因はプローティアスの背信行為にあると暗に責め、またシルヴィアと同じくらい美しい人だったと自分から付け加えている。ジュリアの背の高さを聞かれた時も、わざわざジュリアのドレスを着て女役で舞台でたことがあるから、背の高さがわかると言い、その芝居はギリシャ神話のテセウスが愛の誓いを破ってアリアドネの元から去る場面であり、シルヴィアの同情を引くための言葉を散りばめている。

[Jul.] Madam, 'twas Ariadne, passioning アリアドネ役で、テセウスが愛の誓いを破り
For Theseus' perjury, and *unjust flight*; 卑怯に逃げ去ったので、身も世もなく嘆くのです。
Which I so lively acted *with my tears*, 私は涙を流して迫真の演技をしました
That my *poor* mistress, moved therewithal, 可哀想に彼女は心を動かされて
Wept bitterly; and would I might be dead, 号泣されたのです、私が彼女の悲しみを感じとれない
If I in thought felt not *her very sorrow*. というのなら、死んだ方がましです。

(IV, iv, 165-70, Italics mine)

テセウスの裏切りは、プローティアスがジュリアを見捨てたことを思い出させ、芝居を見ていたジュリアが号泣すると話せば、この過去の話を聞いているシルヴィアの胸にもジュリアの悲しみが感じられるように仕向けている。

ジュリアが小姓姿になった今でも、シルヴィアと美貌を張り合う気持ちがあることは、シルヴィアの肖像画を見ながら自分の顔と比較する場面に見ることができる。

[Jul.] Here is her picture: let me see; I think これは彼女の肖像画、見てみよう、
If I had such a tire, *this face of mine* こんな髪飾りをつけたら、私のこの顔も
Were full as lovely as is this of hers; 彼女と同じくらい十分綺麗だと思うわ
And yet the painter *flatter'd her a little*, それに画家は彼女にちょっとゴマをすっているわね
Unless I flatter with myself too much. 私がいい気になっていないのならね。

(IV, iv, 182-6, Italics mine)

肖像画にあるような髪飾りを付ければ、今は小姓の姿で女性らしさを出していないけれども、自分の顔はシルヴィアと同じくらい美しいと言って、決してプローティアスが容貌の優劣でシルヴィアを選んだのではないことを確認する。

そしてジュリアは宮殿において、プローティアスとシューリオが会話している背後で、話し手を揶揄するようなコメントを入れる道化のようにふるまっている。

『ヴェローナの二紳士』における二つの教育

[Thu.] But well, when I discourse of love and peace? 僕が愛と平和の話ををするときは好きなんだな。

[Jul.] [Aside] But better, indeed, when you hold your peace. 実際は、黙っていればもっと好き。

[Thu.] What says she to my valour? 僕の勇気について彼女は何と言っているの

[Pro.] O sir, she makes no doubt of that. ああ、それについては疑う余地もないと。

[Jul.] [Aside] She needs not, when she knows it cowardice. 慢病だと知っているから疑う必要なし

[Thu.] what says she to my birth? 僕の生まれについてはどうなの。

[Pro.] That you are well derived. 立派な血筋だと。

[Jul.] [Aside] True: from a gentleman, to a fool. そうよ、紳士から愚か者へと流れる血筋ね。

(V, ii, 17-24, Italics mine)

プローティアスは、公爵が婿候補として考えているシューリオなので、シルヴィアのシューリオに対する本音を、棘を抜いてから言い直しているが、ジュリアは皮肉たっぷりに、シューリオは愛想よく黙っているのが一番だとか、シューリオは慢病だから勇気がないことは疑う余地がない、など言いたい放題である。こうして、当意即妙な受け答えができるようになり、必ずしもご主人様の言いつけに従うわけではないジュリアが、準備を整えて最終幕の森の中に入っていく。

<結び>森の中で

第5幕第4場の冒頭、ヴァレンタインは “How use doth breed a habit in a man! / This shadowy desert, unfrequented woods, / I better brook than flourishing peopled towns:” (V, iv, 1-3) と、森で山賊の頭領としての暮らしに満足している。追放処分の頃は、夜にシルヴィアの傍にいられないのなら、ナイチンゲールの歌声にも音楽はないとなっていたが、今では “Here can I sit alone, unseen of any, / And to the nightingale's complaining notes / Tune my distresses, and record my woes.” (V, iv, 4-6) と、ナイチンゲールの調べに合わせて悲しみ苦しみを歌うこともできるようになっている。それは、ミラノから追放されてヴェローナに向かう途中の森で、山賊に襲われたときを境に変化したのである。⁽⁵⁾

[I Outlaw] And partly seeing you are beautified 一つは、あんたがいい容姿を備えているから

With goodly shape, and by your own report あんたの言うところでは語学もできるし

A linguist, and a man of such perfection 俺たちみたいな稼業に必要なものを

As we do in our quality much want — 完璧に備えた男だから

(IV, i, 55-8, Italics mine)

ヴァレンタインは容姿が優れていて、盗品を売買するのに必要な語学も堪能であり、この

稼業には完璧な男性となっていた。ミラノの宮廷では、完璧な紳士を目指して修辞法を駆使した言葉に熟達しても、仕掛けられた罠に落ちてしまったが、森では、山賊を指揮して女性や貧しい旅人に危害を加えない義賊として暮らすことができた。

シルヴィアがプローティアスに襲われそうになったとき、ヴァレンタインは “Ruffin! Let go that rude uncivil touch, / Thou friend of an ill fashion.” (V, iv, 60-1) と叫んで助けに入り、プローティアスを “ ‘Mongst all foes that a friend should be the worst!” (V, iv, 72) となじる。プローティアスは、即座に “My shame and guilt confounds me. / Forgive me, Valentine” (V, iv, 73-4) と罪の意識を感じて許しを請う。

[Val.] Then I paid; それであれば俺は救われる

And once again I do receive thee honest. 再び君を信頼する友として受け入れよう
Who by repentance is not satisfied, 改悛した者を許さない者は、天のものでも
Is nor of heaven, nor earth; for these are pleas'd 地上のものでもない、天と地が許し
By penitence th'Eternal's wrath's appeas'd. 永遠の神の怒りも改悛によりなだめられるのだから
And that my love may appear plain and free, 俺の愛が偽りなく寛大だということを示すため
All that was mine in Silvia I give thee. シルヴィアに対する俺の権利をすべて君に譲る。

(V, iv, 77-83, Italics mine)

悔い改めたプローティアスをヴァレンタインが許し、その上、シルヴィアに対する自分の権利をプローティアスに譲ることについて、その意味を考えれば、紳士教育の許しを与えるという比喩として使っているのではないか。ミラノ公爵がヴァレンタインを見て、“I do applaud thy spirit,” (V, iv, 138) と、シューリオに比べて森で逞しく暮らしていたことを評価し、娘と結婚することを許す。

[Duke] Know then, I here forget all former griefs, そこで、私は過去の不満をすべて忘れ
Cancel all grudge, repeal thee home again 恨みはすべて水に流し、君を宮廷に呼び戻し
Plead a new state in thy unrivall'd merit, 君の比類ない優秀さを考えて新しい地位につけよう
To which I thus subscribe: Sir Valentine, その優秀さをこう記す、サー・ヴァレンタイン
Thou art a gentleman, and well deriv'd, 汝は紳士である、由緒ある家柄のもので
Take thou thy Silvia, for thou hast deserv'd her. シルヴィアを受け取れ、君は娘にふさわしい。

(V, iv, 140-5, Italics mine)

過去の遺恨は水に流し、ヴァレンタインを新たな地位につけて、娘も与えるという流れは、ヴァレンタインがプローティアスに提示した条件と類似している。親友の裏切りを忘れ、

もう一度尊敬すべき友として受け入れ、シルヴィアへの権利を渡そうという、実際にそうしなくとも森の支配者としての締めの言葉だったのかもしれない。

人を許すことの重要性は、ヴァレンタインが仲間の山賊たちの追放処分を願い出て、公爵の元で新たに任務につけてもらうよう頼むことでも強調される。

一方ジュリアは、失神した後に、プローティアスにわざと取り違えた指輪を渡して、小姓のセバスチャンがジュリアであることに気付かせようとしている。シルヴィアに取り違えた手紙を渡そうとして、違和感を意識させたのと同じやり方で、今度はプローティアスにジュリアの指輪を見つけさせている。

[Pro.] But how cam'st thou by this ring? At my depart どうしてこの指輪を持っているのだ、

I gave this unto Julia. 出立のとき俺がジュリアにやった指輪だ。

[Jul.] And Julia herself did give it me, ジュリア自身が指輪を私にくれたのです

And Julia herself hath brought it hither. ジュリア自身がその指輪をここに持ってきたのです。

(V, iv, 95-8, Italics mine)

エリザベス朝の喜劇の定番として、男装していた女性が身分を明かすのは、長い髪がほどけたり、女性の身体つきが偶然見えてしまったり、と隠していたものが発見されることが多い。しかし、ここではジュリアが“Julia herself”と繰り返すことで、意図的に自分がジュリアであることを暴露していることがわかる。タイミングと当意即妙な受け答えを武器に、ジュリアはプローティアスに対決を迫る。

[Jul.] Behold her that gave aim to all thy oaths, あなたの誓いのすべての的であり、その誓いを

And entertain'd 'em deeply in her heart. 胸の底で育んできた女をごらんなさい。

….

It is the lesser blot modesty finds, 男が心を変えるのに比べれば、女が姿を変えるのは

Women to change their shapes, than men their minds. 慎みの点で汚点とは言えません。

(V, iv, 100-8, Italics mine)

男装している自分の姿を注視せよ (behold) と宣言し、男が心を変えるのに比べれば、女が姿を変えるのははしたないことではないと言い切っている。この勢いに押されて、プローティアスは、“Than men their minds? 'Tis true: O heaven, were man / But constant, he were perfect.” (V, iv, 109-10) と、心変わりさえなければ男は完璧なのに、と言うのだが、プローティアスは個人的な反省ではなく、一般名詞 (man) を使うことで、その責任を男性全体に押し付けているところが不完全な反省ともいえる。それは、“What is in Silvia's face

but I may spy / More fresh in Julia's, with a constant eye?" (V, iv, 113-4) とプローティアスが実感を込めて言う時、シルヴィアの容貌はきれいだったけれど、ジュリアの目鼻立ちもそう悪くないじゃないか、という忘れていた愛情を再発見した経緯にもつながっていく。プローティアスがジュリアを選ぶことこそ、ジュリアの叱責という最後の教育の成果であった。

こうして一見唐突と思える大団円の意味も、それぞれの段階で教育を受けてきた結果であると考えれば、筋が整っており素直に頷けるのである。

<註>

- (1) *The Arden Edition of the Works of William Shakespeare: The Two Gentlemen of Verona*, edited by Clifford Leech (London and New York: Routledge, 1992) この作品からの引用は全てこの版によるものとする。
- (2) Marjorie Garber, *Shakespeare After All* (New York: Anchor Books, 2005) p.50.
J. L. Simmons, "Coming Out in Shakespeare's the Two Gentlemen of Verona", *ELH*, vol.60 (1993), p. 861. Garber はここでは誰もシルヴィアを譲ると真剣に考えていないし、パターン化した展開だと述べ、Simmons は愛と友情の対立というルネサンス特有の主題を使い、この台詞はエリザベス朝の理想を反映した和解の象徴だとしている。
- (3) Henry Peacham, G. S. Gordon, *Compleat Gentleman*, 1634 (Oxford: The Clarendon Press, 1906) p.21.
- (4) Farah Karim-Cooper, *Cosmetics in Shakespearean and Renaissance Drama* (Edinburgh: Edinburgh UP, 2012) p.24.
- (5) Maurice Hunt, "The Two Gentlemen of Verona and the Paradox of Salvation", *Rocky Mountain Review of Language and Literature*, vol.36. (1982) p.17.